

〈講演〉

## 過去の記憶と「記憶の断罪」 damnatio memoriae

— 古代ローマ人はどのように歴史を記憶し、歴史を創り換えてきたかを中心に —

島田 誠

ただいまご紹介いただきました島田です。「過去の記憶と記憶の断罪 damnatio memoriae」という題で講演をさせていただきたいと思えます。まず、どういう理由でこのテーマを選んだか申し上げます。

実は「記憶の断罪」という言葉はローマ史あるいはローマ法制史研究においては、古くは一八世紀から使われている専門用語です。その用語が表わす対象は、私も大学院で勉強を始めたころから頭の中に引っ掛かっていた歴史現象です。この現象はテクニカルにもまた概念的にもいろいろ難しいところがあり、なかなか取り上げることができませんでした。ところが、昨年度に私は一年間の研修をいただき、その間に Harriett Flower というアメリカの学者が書きました『忘却の技術 ローマ政治文化における不名誉と忘却』*The Art of Forgetting: Disgrace & Oblivion in Roman Political Culture*, Chapel Hill, 2006 という本を読みまして面白いと思えました。この本では古代ローマの政治における記憶のコントロールに

関する大変興味深い議論が行われています。ところが、ローマの共和政の政治・社会状況に関する彼女の考え方には私に必ずしも納得できない部分もあり、改めて古代ローマにおける「過去の記憶」の問題を考えてみることにした次第です。

早速本題に入りたいと思いますが、今日は二つのことをお話しします。その一つ目は、古代ローマ人ほどのように自分たちの過去を記憶し、そしてその記憶を新たにしていたのかということ。つまり過去の記憶がいかにして形成されていたのかという問題です。そして、二つ目にお話したいのは、古代ローマに存在した政治的・社会的に有力な個人の記憶を抹消するという習慣もしくは法的手続である「記憶の断罪」damnatio memoriae についてです。この手続きがどのようなものであったか、どのようにして歴史的に展開してきたのか、その手続きが記憶を保存して喚起する方法とはどのような関係にあったのかということを考えてみたいと思えます。

## 過去の記憶の形成について

まずローマにおける歴史叙述について、簡単に話したいと思います。ローマにおける最初の歴史書が書かれたのは前三世紀後半のことです。その最初の歴史家クイントゥス・ファビウス・ピクトルはギリシア語でローマの歴史書を著しました。この最初の歴史書はローマ人を想定読者として書かれたのではなく、当時の地中海世界の共通語であったギリシア語を用いてローマの姿を外国人に紹介するために書かれたと考えられます。彼以後、前期年代記作家と呼ばれる歴史家たちが同種の歴史書を幾つか書きました。その後、前二世紀にはローマは地中海世界最強の軍事大国へと発展し、ローマ人も自国語であるラテン語でもって歴史を書くようになります。その最初が大カトーの書いた『オリゲネス』という本です。彼に続いて前二世紀の後半から前一世紀前半頃に、後期年代記作家と呼ばれる人たちが次々にラテン語でローマの歴史を書きます。これらの歴史書もほとんど断片しか残っておりません。ローマにおける歴史叙述が成熟するのは共和政末期です。成熟期を代表するのがサルステイウスとリーウィウスという歴史家です。サルステイウスは同時代や近い過去のローマの戦争や政治事件について精彩ある筆致で描きました。リーウィウスは伝説上のローマの建国から彼の同時代までの歴史を著し、ローマの古い時代に関する我々の知識の多くがリーウィウスの記述に依る程、その伝える内容は豊富です。

ところで、リーウィウスの文章を読むと一つの疑問が生じます。それは何に基づいてその豊かな歴史像が描かれたのであろうかとい

う問題です。普通は先行する歴史書、特に後期年代記作家たちを参考にしたとされますが、残存している後期年代記作家たちとリーウィウスの記述を比べると、その内容も文章の臨場感も違います。彼は先行する年代記以外にも過去の記憶を知る術を持っていたのではないのでしょうか。前一八六年に起こりましたバッカナリア事件の記述に的を絞って、その手段について考えてみようと思います。

バッカナリアというのはバックス神の秘密祭儀を意味します。その祭儀で悪事が行われていたのが暴かれて厳罰に処されたのがバツカナリア事件です。その悪事とは、その密儀に参加するための入門の儀式を受けると自分の全財産を教団に贈与することが要求され、それを拒絶すると教団がその人を殺してしまい、財産贈与の契約書を偽造したなどというものです。その事件に関するリーウィウスの記述に不思議な点があります。悪事が暴露されるまでの記述と教団を追及して処罰する記述の文体が不統一であるということです。

悪事暴露の記述は、非常にロマンティックであり、ドラマティックに展開をします。若いローマ騎士アププリウス・アエプティウスが母親とその再婚相手からバツカナリアの入門儀式を受けるように勧められます。ところがこの騎士の恋人がこの祭儀の秘密を知って強く反対します。怒った母親に家を追い出された騎士は仕方なく叔母の家に逃げ込みます。その叔母がコンスルのスプリウス・ポストゥミウスの義母を経て訴え出て、コンスルが事件を調査し、真相を知るとい話です。その後にコンスルが元老院に報告し市民たちに状況を伝え、元老院決議や民会決議によって教団が弾圧されるという記述が続きます。この部分は詳細ですが非常に堅苦しい記述

となり、前半のメロドラマ的な記述とは異質な記述になります。果たして先行する年代記だけを資料として、このような記述の差が出るのであろうかという疑問を持っています。

どうやらこの疑問を持つのは私だけではないようで、様々な仮説が立てられています。その中で英国の研究者の仮説 (T. P. Wiseman, *Roman Drama and Roman History*, Exeter, 1998) が大変興味深いものです。彼によれば、前半部分はドラマのプロット、それも実際に上演された喜劇の筋書きであるとされます。実は、悪事が暴露されるまでの人物の配置が喜劇のプロットとかなり一致します。古代の喜劇のプロットには、若い恋人同士が年上の悪人たちのせいで危難に遭うが、やはり年上の好意的な人物が出現し、この恋人たちの危難を救うという決まったパターンがあります。このパターンとリーウィウスのバックナーリア事件の前半の記述が一致する訳です。さてローマの街にバックス神と同一視されるリーベル神の神殿があり、その神官や信者たちがこのバックナーリア事件が起こると神殿とその信者たちを守るために劇を作って神殿の祭礼で上演し、それが好評を博して定番の演目になり、その筋書きが後期年代記作家たちの年代記の中に取り込まれてからリーウィウスの記述に取り入れられたというのが Wiseman の仮説です。

では、事件の後半の記述の資料は何なのでしょう。年代記も使われているでしょうが、同時に事件に関して発布された元老院決議が参照されていると思われます。実はバックナーリア事件に関する元老院決議を刻んだ青銅板が現存し、そこでは、イタリア中の都市に決議を送って掲示するように規定されています。恐らく多数の写

しが各都市に送られたと考えられます。その一つか、ローマ市の原本をリーウィウスは読んでいる可能性が高いと考えられます。そこから後半の堅苦しい文章が出てきていると思われるます。

以上のようにリーウィウスの歴史叙述の中には先行する年代記以外にもドラマなどのパフォーマンスも資料として用いられ、さらには各地で掲示されていた金石文も用いられて、それらが過去の記憶の形成にとつての重要な資料になっていたと考えられます。

ここでローマ人が自分たちの歴史を知り、過去の記憶を形成するために使っていたと思われる劇などのパフォーマンスや金石文などについて少し考えてみたいと思います。

まず劇についてです。古代ローマでは、劇は様々な祭礼の場で上演されていました。それらの劇は悲劇と喜劇に大きく分かれ、さらにギリシア風の劇とローマ風の劇に分かれます。ギリシア風劇はギリシア劇を翻訳あるいは翻案したものです。ローマ風劇は喜劇ではトガタ劇、悲劇ではプラエテクスタ劇と呼ばれてラテン語で演じられます。このローマ風劇が、ローマ人の過去もしくは同時代の重要な事件をローマ人の記憶の中に刻み込むことになる重要なメディアであったと考えられます。

さて古代ローマ社会には、演劇の他にも過去の人の業績や同時代の事件を呼び覚ますパフォーマンスが存在しました。一つは、有力家門の葬儀です。その際に注目されるのが祖先たちの肖像 (マスク) *imagines maiorum* の存在です。これは、一定以上の公職を務めた人が制作することを許可される蠟製の肖像であり、普段は家の玄関広間の木箱に安置されていますが、葬儀の際に持ち出されて祖先

と体格の似た人に被られ、葬列の中で生前の社会的地位に相応しい随員を引き連れて練り歩きます。つまりその家がどれほどの高い公職に就いた祖先を出したかが眼に見える形で示されます。その葬列の途中で追悼演説が行われます。大抵、親戚の若者が演壇に立ってわが家は代々このように偉い人がいて、亡くなった人物はこんな業績を挙げたということをしやべります。その間中、マスクをかぶった者たちが演壇の周りを囲んでいます。また同時代の重大事件を示して記憶させるのが凱旋式における行列 *pompa triumphalis* だ。凱旋將軍は部下の兵士と戦争で捕らえた捕虜を引き連れて凱旋式を挙げます。その際に征服した国を示す地図が掲げられ、征服した国々や都市の名前をいちいち書いたプラカードあるいは模型が延々と行列を連ねます。

これらのパフォーマンスを受けて、記念建造物 *monumenta* が建てられます。葬儀であれば墓と墓碑銘が、凱旋式であれば凱旋將軍の顕彰文が刻まれた大理石の像が造られ、広場などの公共の場所に建てられます。このような記念建造物と金石文とが一体になって、過去の記憶を保ち、想起させるという役割を果たすことになります。記念建造物の中で、初代皇帝アウグストゥスが前二年に奉獻したアウグストゥス広場が注目されます。この広場に入ってまず目に入るのが凱旋式用の四頭立て戦車に乗った巨大なアウグストゥス像です。その左右の柱廊には共和政ローマの凱旋式を挙げた將軍たちの像と彼らの業績をたたえる顕彰文が見えます。さらにその奥にはマルス神殿があり、その左右にローマの建国の王ロムルスの像と彼の祖先であるアルバ・ロンガという都市の王家の人々の像が建っている。

ます。アウグストゥスの属するユリウス氏族の祖先たちもこのアルバ・ロンガの王族でした。この広場全体から、アウグストゥスが共和政の將軍たちの正統な後継者であるというメッセージと、アウグストゥスがアルバ・ロンガの王家の子孫でもあるとのメッセージが伝えられています。つまりアウグストゥスが自分をローマの歴史の中でどんなふうに位置付けたいと考えていたかが、この広場という記念建造物から分かる訳です。

### 「記憶の断罪」*damnatio memoriae*

古代ローマには、「記憶の断罪 *damnatio memoriae*」という個人に対してその記憶を断罪し、それを抹消する手続きが存在しました。この「記憶の断罪」は、近代に造語された言葉で古代には存在しませんでしたが、通常は個人に関する記念建造物を破壊し、金石文を破壊して、公職者や神官のリストから名前を削ること、肖像を葬礼などで公衆に展示することの禁止、子孫が故人の名前を受け継ぐことの禁止と考えられています。その他、故人の著作の焼却、誕生日が凶日とされること、故人の家の破壊、所有財産の没収、遺言の無効化なども挙げられますが、これらは必ずしも「記憶の断罪」には含まれないと思われまます。そして、この「記憶の断罪」は帝政期には皇帝にまで適用されるようになります。

では、この「記憶の断罪」はどのように成立したのでしょうか。従来の研究において初期の例として挙げられるのは、スプリウス・カッシウスなど、ローマ共和政初期のパトリキとプレブスの対立でのプレブス側の指導者です。彼らが記憶の断罪を受けたというふう

に主張されますが、これはあやしいと私は考えています。本当にこの「記憶の断罪」の萌芽が見られるのは共和政末期、前二世紀の後半のことと考えられます。グラックス兄弟の弟のガイウス・グラックスと彼の協力者であったマルクス・フルウィウス・フラックスが最初に「記憶の断罪」と言える処置を受けたと考えられます。彼らは反対派の手で殺害され、その後彼の親族の女性たちは嘆き悲しむことを禁じられます。これは端的に言うところ葬式を行うことを禁止したと考えていいと思います。ただし、これらは法的手続きというよりは政治的抑圧であったと考えられます。そして、スッラが政治的抑圧としての「記憶の断罪」を本格的に実施します。彼はいわゆる閥族派の指導者ですが、内乱に勝利した後、民衆派指導者である政敵マリウスたちの記憶を徹底的に抹殺しました。

その後、カエサルとアウグストゥスの時代はこういうふうな苛烈な政敵の記憶に対する弾圧、あるいはそれを抹消しようとする動きは見られません。カエサルは、そもそも政敵をほとんど許してしまい、その揚げ句に許した人に暗殺されてしまった人であり、政敵の記憶を抹消したりはしていません。そしてカエサルの後継者アウグストゥスも、最大のライバルであったマルクス・アントニウスの名前を一度コンスル表などから削った痕跡がありますが、最終的には再び刻み直させています。ところが、次の二代皇帝のティベリウスの時代には、「記憶の断罪」とみなすことができる行動が目立ち、このティベリウス時代にローマにおける「記憶の断罪」という手続きが定着すると考えられます。

さて、この「記憶の断罪」という手続きは、先に述べた「記憶の

形成」とはどのような関係にあったのでしょうか。後一九年に亡くなった皇帝の養子（甥）のゲルマーニクスとそれに生前の彼と対立していた有力元老院議員ピソーンに関する事例が、ティベリウス時代における「記憶の形成」と「記憶の断罪」のあり方をよく示していると考えられます。

ゲルマーニクスは、第三代皇帝の最有力候補とみなされていましたが、東方において皇帝を代理する職務中に病没しました。その死については、当時には毒殺あるいは呪殺であるという噂がありました。その際に疑われたのが、シリア総督であったグナエウス・カルプルニウス・ピソーンでした。彼は、生前のゲルマーニクスと仲違いし、ゲルマーニクス死後にはその部下との間に武力衝突を起こしていました。そのピソーンがゲルマーニクスの死に対して責任ありと訴えられ、裁判中に自殺することになりました。最終的には彼がゲルマーニクスの死に責任があるとはされませんでした。皇帝の代理であるゲルマーニクスに対して反抗した廉で有罪とされました。この二人に対して、ゲルマーニクスに対しては記憶を永続化するため、ピソーンに対しては記憶を断罪するための処置が元老院決議によってとられたことが知られています。

ゲルマーニクスの記憶に関する元老院決議では、次のようなことが定められています。まずゲルマーニクスのためにローマ市の「マルスの野」のフラミミニウス競走場に凱旋門が建てられます。そこには「ローマの元老院と市民たちがゲルマーニクス・カエサルの記憶のために建てた」という碑文が刻まれ、その上部に凱旋式の戦車に乗ったゲルマーニクスの肖像が安置されることが命じられています。

す。さらにゲルマーニクスに縁ある帝国各地にも凱旋門が建てられ、彼の命日に追悼のための儀式が行われることも定められています。最後には、この元老院決議が「永遠の記憶」のために青銅盤に刻まれて公示されること、この決議の写しがイタリア中と全属州の地方都市に送付され、その写しが各都市の最も繁華な場所に掲示されることが命じられています。

ピソーに関する元老院決議では、逆に彼の記憶を抹消することが規定されています。まずピソーの罪が述べられた後に、女たちによって彼の死への悲嘆が禁じられ、さらにローマ市や帝国各地にあったピソーの彫像や肖像が取り除かれること、カルブルニウス・ピソー一族の葬儀にこのピソーの肖像が加わらないこと、さらに彼の肖像が保存されないことなどが定められています。また、ゲルマーニクスの肖像の碑銘からピソーの名前が削られる。さらには彼には同名のグナエウス・ピソーという息子がいましたが、その息子は改名することが定められています。そして最後には、この元老院決議も、やはり「永遠の記憶」のため、具体的にはゲルマーニクスの稀有の自制心とピソーの悪事を知ることができるようにこの決議は刻まれると定められています。最後に、この決議の写しが各属州の最も人口繁華な都市、その最も繁華な場所に掲示されることが命じられています。

この二つの元老院決議の規定から、ゲルマーニクスに関する記憶を形成して永遠なものにしようとする手続きと、ピソーの記憶を断罪してそれを抹消しようとする手続きが、ちょうど裏腹の関係になっているということが明らかだと考えられます。

このようにローマ人たちは、自分たちの過去の記憶を単に歴史書とか、あるいは文書庫に保管されている記録などからだけ知るのでなく、演劇の上演、あるいは葬儀、凱旋式などで行われるパフォーマンス。さらには墓所での墓碑銘、凱旋式後に建てられた記念建造物 *monumenta*、そこに刻まれている顕彰文など様々な手段を用いて、自分たちの過去の記憶を形作っていたと考えられます。そしてローマ人が特定の人物の歴史上の存在を抹消しようと考えた場合には、やはり葬儀やそこで使用される肖像の禁止、さらに記念建造物の破壊やそこに刻まれた金石文の削除が行われていたと考えられます。つまりローマ人にとって「過去の記憶」は、さまざまなパフォーマンス、さらには記念建造物などから総合的に得られるものであったということを結論にして、私の講演を終わりにしたいと思います。ご清聴、どうもありがとうございます。